

報道関係者各位

2025年2月18日  
特定医療法人南山会

**【患者の尊厳を尊重】拘束せずに転倒や危険行為を回避する方法を模索  
「ケアする病院ネットワーク」を全国10施設の医療機関で発足  
第1回立ち上げ記念研究会開催レポート**

「その人らしさをともに創造する」をビジョンに掲げ、精神医療や福祉サービスを提供する特定医療法人南山会峡西病院（本社：山梨県南アルプス市、院長：川崎洋介、以下「当院」）は、この度全国10施設の医療機関とともに「ケアする病院ネットワーク」を発足しました。それを記念し、2025年2月7日（金）、東京都内でケアする病院ネットワーク第1回立ち上げ記念研究会が開催され、当院院長の川崎洋介も発起人の一人として登壇いたしました。



特定医療法人南山会峡西病院院長 川崎洋介

■ ケアする病院ネットワークについて

この研究会は、全国各地の10か所の医療機関が、日頃から患者に対して極力拘束を行わない医療を実践する中で得た知見や事例を共有することで、医療機関における患者の治療とケアの在り方を考え、日本全国の医療の質向上を図ろうとする意欲的な取り組みです。今後も参加してくださる医療機関を増やしつつ、会を継続していく予定です。

## ケアする病院ネットワーク



参加医療機関（2025年2月現在）

### ■ 安全のため認知症患者を拘束すべきか、尊厳を重視し拘束しないべきか悩む医療従事者

日本では平均寿命の延伸などを背景に高齢化が進み、2040年までに85歳以上の高齢者が推計で1,000万人を突破すると見込まれています。<sup>1)</sup>それに伴い、認知症患者も大きく増加することが予測されています。<sup>2)</sup>

認知症は一般的に「もの忘れが増える病気」として広く知られていますが、実際には進行に伴い、様々な症状が見られます。個々の認知症患者によって見られる症状は異なりますが、多くの場合は進行に伴って判断力や危険を正しく認識する力が徐々に損なわれていきます。それにより、脚の筋力が低下した転びやすい状態で歩き出して転んでしまったり、身体的な治療のために必要な点滴などを自ら抜いてしまったりすることがあります。また、脳の機能低下により怒りやすくなり、場合によっては周囲でケアにあたる看護・介護スタッフに対して暴力的になってしまうこともあります。

それらの症状がある場合、医療機関では安全に配慮した専用の器具を用いて身体をベッドなどに拘束する場合があります。たしかに拘束を行えば転んだり、危険な行為をしたりする可能性は無くなりますが、身体を自由に動かせなくなるため、筋力の低下を招いたり、関節の曲げ伸ばしができなくなる“拘縮”と呼ばれる状態を招いたりすることになり、身体機能を大きく損なうきっかけになります。また、本人の行動を抑制するため、本人に強いストレスを与えることになり、精神的な興奮など、二次的な精神症状を誘発する可能性があります。本人に対して身体的、精神的に多大な悪影響を及ぼすだけでなく、拘束を患者に対して行う看護・介護スタッフも本人の意に沿わないケアを行わなければならないため、強いストレスを感じます。そのため本来は“拘束しない医療”を提供することが望ましいのですが、日本においては入院患者が転んで怪我をした場合、医療機関側の見守りや管理が行き届いていないためだと見なされ、叱責されてしまうことが多く、そのジレンマに多くの医療従事者が頭を悩ませています。

### ■ “拘束しない医療”を提供できる医療機関の輪を広げる

2025年2月7日（金）に行われましたケアする病院ネットワーク第1回立ち上げ記念研究会では、はじめに今回の研究会の発足にあたって全国の医療機関にお声掛けをされました、医療法人大誠会内

田病院（本社：群馬県沼田市）の院長田中志子(ゆきこ)先生より「認知症のある患者さんに医療を提供する際、治療のために身体拘束をするのか、それとも患者さんの尊厳を尊重して拘束しないケアを優先するのかという、二者択一を迫られるような思いになることもある。また、医療者による対応が困難な患者さんについては“精神科で診るべき”という考えも根強く残っているように感じている。しかし適切な対応を行い、適切な環境を整えることで、身体拘束をしなくても滞りなく治療を行えている医療機関は確かに存在している」「ケアする病院ネットワークは、必要な治療と患者の尊厳を大切にしたい」という、大変力強いお言葉がありました。

その後、発起人がおひとりずつ登壇し、自己紹介と会に向けた思いをお話されていきました。当院の川崎からは「南山会はフィロソフィー(法人運営における哲学)として《大善の功德と小善の罪》というものを掲げている。患者さんを拘束することは小善の罪、つまり悪ではないが結果として患者さんを害することになってしまう行為。拘束せずに身体機能の訓練を行うことによって、拘束しなくても安全に生きていけることを目指すべき」「そのために、精神科医療も認知症医療も、その人らしさを尊重するということが第一に考えて治療とケアを提供していきたいと思っている」「今回全国の同じ志を持った病院が集まったことを大変嬉しく思います」とお話がありました。

研究会では、特別記念講演として厚生労働省医政局医療課長の林修一郎先生より「これからの医療におけるケアの展望」というテーマで、過去の診療報酬改定においても“拘束しない医療を日本で実現すること”を念頭に置いて、様々な改定の努力を積み重ねてきたことが紹介されました。また今後に向けて「身体拘束を行わないケアが、どこかの病院が行っている《珍しい取り組み》ではなく、《当たり前前の取り組み》になってほしい。そのためには精神論的な議論を行うのではなく、ノウハウやスキルを全国で共有していくことが重要。今後の会の広がりにとっても期待している」とお話がありました。また、実践事例発表として各医療機関における革新的な取り組みについて紹介があり、発表者同士の意見交換の時間なども設けられました。



右から田中志子先生(内田病院)、山口晴保先生(群馬大名誉教授)、武久敬洋先生(平成医療福祉グループ)、川崎洋介(当院)、佐藤仁美先生(城東病院)、富家隆樹先生(富家病院)

## ■研究会の発足にあたって 院長川崎洋介より



本研究会は大誠会内田病院理事長 田中志子様の声掛けから、志を同じくする当院も含めた全国 10 病院で連携して立ち上げました。地域はもちろん診療科もそれぞれ異なりますが、とにかく良質なケアを提供することで、患者さんにより良い人生を送ってほしいという気持ちを同じくする病院が集結しました。

当院も、患者さんを中心にして、障害を持ちながらも新しい人生の意味や目的を見出していくパーソナル・リカバリーを考えた精神医療を実践し、また患者さんの尊厳を大切にされた身体的拘束のない認知症医療を実践していく中で、こうした取り組みを、志を同じくする全国の病院と共有し、また全国の病院の革新的な取り組みを学ぶことで、日本の医療の質を向上させていきたいと考えています。

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」(令和 5(2023)年 4 月推計)
- 2) 厚生労働省「令和 5 年版厚生労働白書」 図表 3-2-11 認知症の人の将来推計

## ■ 会社概要

- 【社名】 特定医療法人南山会
- 【設立】 1957 年 7 月 2 日
- 【代表】 理事長 川崎 洋介
- 【住所】 〒400-0405 山梨県南アルプス市下宮地 421
- 【事業内容】
  - 精神科病院 峡西病院
  - 障害者地域活動支援センター きがる館
  - 訪問看護事業所 アルプス訪問看護ステーション
  - 介護老人保健施設 峡西老人保健センター
  - 就労継続支援 B 型事業所 アルプスファーム
- 【URL】 <https://www.nan-zan.or.jp/>

### <お問い合わせ先>

特定医療法人南山会

TEL : 055-282-2151 (代表) 055-244-7715 (直通) FAX : 055-284-4886

担当 : 川口